

日本IT書紀

177 次鋒

09 玉鏡篇
卷之二十四 侍者

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十七

次鋒

一

剣道や柔道の団体戦は、通常、一チーム五人の選手で編成される。野球なら一番、二番、三番と数字で呼ぶが、武道では古来の合戦における陣立てに見立て、「先鋒」「次鋒」「中堅」「副将」「大将」と呼ぶ。

三勝すれば勝ち抜きが決まる。

先手必勝なので、「先鋒」は勝つことが必須の要件となる。「先鋒」が勝利したあと「次鋒」が勝てば、戦いは断然有利だし、「先鋒」が負けても「次鋒」が勝てば一対一、しかも後勝した方に勢いがつく。

そこで「次鋒」を任じられた選手には、多少の工夫が必要。勝負は三本のうち二本先取で決まるから、ともあれ一本を取らなければならない。機転が利き、すばしこい動きができ、やや変則的な太刀筋の者が選ばれるらしい。

ソフトウェア業が立ち上がった時期にも同じことがいえた。日本電子開発、コンピュータアプリケーションズ、日

本コンピュータ・ダイナミクス、ソフトウェア・リサーチ・アソシエイツなどが「先鋒」とすれば、永妻壽のシステム開発から以後に設立された企業は「次鋒」に相当するであろう。日本のソフトウェア業の先行きは、彼らがどう頑張るかにかかっていた。

ソフト産業の「次鋒」を概観したい。

ソフトウェア産業振興協会の発起人に、在阪の企業として唯一名を連ねた日本コンピュータ・システム（NCS）は、大阪市北区梅が枝町で舟渡善作が創業した。前身は六年十月に設立された「日本システム・マシン株式会社」である。

六二年三月に日本電気とコンピュータの販売特約店契約を結び、「NEAC1201」の販売とサービス業務を開始したのがソフト分野に進出するきっかけとなった。六六年九月に電子計算機部を分離独立し、資本金五百万円、従業員四十五名をもって「日本コンピュータ株式会社」が設立され、翌月、社名を変更した。

一九七二年三月末現在でいうと、資本金は四千万円に増資され、従業員数は二百七十人に増えていた。日本電気が大阪市に開設したコンピュータ・センターを購入して、ソフトウェア開発だけでなく受託計算も手がけた。売上高は

四億五千三百四十二万七千円であった、と記録されている。それから十年後の一九八二年、本社は大阪市北区中之島の住友中之島ビルに移り、東京都港区芝公園の秀和芝パークビルに東京支社を開設していた。資本金は一億二千万円（七二年比三倍）、従業員は六百三十人（同二・三倍）、売上高は六十六億円（十四・七倍）だった。

従業員数は二倍強に増えたに過ぎなかったが、売上高が約十五倍というのは驚異的な伸びである。派遣から受託への転換がスムーズに進んだのは、日本電子開発の前例によるところが大きかった。

関西地区で数少ないソフト会社の代表格でもあった。

「それまで同じ大阪市内にあるソフト会社の交流はほとんどなかった。ソフト協の設立でコンピュータサービスの大川（功）さんと知り合い、その後、関西支部の活動を通じて各社の交流が深まっていった」

と舟渡はいう。

八九年、長年の協会活動に対し藍綬褒章を受けた。

大阪に本拠を構えたソフト会社として特筆しておかなければならないのは、日本システムディベッロPMENT（NSD）という会社である。

創業者は三和銀行で事務企画部長を務めた大東清成とい

う人物で、年に数回、新宿の東京本社で開かれた懇談会に招かれたことがある。温和な人柄であって、まずソフト業界きつての紳士という印象が強い。

一九一九年大阪市に生まれ、四三年関西学院大学法学部卒というから、独立して会社を興したときは五十歳になっていた。ものの喩えに

「七十からの手習い」

とはいいが、変化の激しいこの業界で五十歳での起業には勇気が要る。

パンチ業務の受託からスタートし、コンピュータ・システムの一括運用管理サービスとソフトウェア開発で事業を拡大した。株式を東京証券取引所二部に上場するまで、二十七年二か月に及んで社長として指揮を振るった。

一九九六年に三和銀行から招聘した内久保晋一郎に後を譲った。その直後の九月二十六日、喘息の発作を起こして不帰の人となった。享年七十七。

内久保は大東亡き後のNSDをよく守り、だけでなく株式を東京証券取引所一部に上場した。一部上場を機に、長く大東の一番頭であり、かつ懐刀として社業の発展に大いに貢献のあった鳥川美光にあとを任せた。

その鳥川が社長就任からわずか一年で体調を崩し鬼籍に入るとは、だれも考えなかった。二〇〇一年十二月四日、

食道ガンが悪化して死去。享年六十五。

もともと痩せぎすの体格だった。耳にかかる銀髪をかきあげるとき、大学の教授然とした風情があった。大東と同じように温和な人柄が、周囲から好まれた。筆者もNSDを取材するとき、もっぱらこの人を窓口にした。

鳥川は一九三六年大阪市に生まれ、大阪大学経済学部を卒業して大津タイヤに入った。ダンロップタイヤの系列会社で、鳥川が入社した当時は業績が芳しくなかった。このため日本セロファンに転職した。ここで初めて計算機と出会った。一九六四年のことだった。

「最初に操作したのは昔ながらのパンチカード・システムだね。それがやっと電子計算機に替わるといので、プログラムの移行作業をしていたとき、会社が倒産しちゃって」

と、生前に聞いたことがある。

パンチャーやプログラマーの再就職先を探し、一息ついたとき、見回すと自分ひとりしか残っていないかった。

六八年の八月、大学のゼミで知り合った教授が、

「ここならどうだ」

と紹介したのがNSDだった。

「まだ会社は設立されていないかった。大東さんは二年ほど前から独立の準備をしていたが、集まったのはパンチャ

ーやプログラマーで、営業を任せることができる人材を探していた」

こうして四十九歳の男と三十二歳の男が出会い、四半世紀にわたる二人三脚が始まった。

会社設立から二年後、三和銀行の紹介もあってNSDは新卒者十人を日立製作所の戸塚工場に派遣することができた。戸塚工場には日立の「ソフトウエア工場」があった。これが発展・独立して現在の日立ソフトウエアエンジニアリングが設立される。

次いで神奈川県の大井松田に完成した第一生命のコンピュータ・センターの運用を一括して任された。さらに四七年には、日立製作所経由で日本電信電話公社横須賀通信技術研究所の基礎技術開発部門に技術者を出すことが決まった。

「これからの商売は、やはり東京だな」

大東が鳥川に言った。

「わたしが行け、ということなんだな、と考えました。

体制が整ったら、大阪に戻るつもりで東京に来た。ところがわたしはまだ、東京にいる。ということは、体制作りは途上ということですよ」

社長に就任したとき、そんな軽口を言っていた鳥川の笑顔を思い出す。

二

伊藤正之は日興証券に勤めていた。証券取引の計数管理で電子計算機というものを知った。最初に扱ったのは真空管式のUNIVAC60である。入社してしばらくの仕事は、真空管のチェックだった。

——そのうち、いろいろな産業で様々な企業がコンピュータとネットワークを使う時代がくるのだろうか。

そのときは漠然とそう思った。

IBMシステム/360シリーズが出て、その印象が一段と強くなった。株式の動きから、次の時代が読める。読むだけでなく、自らの能力を資財を投資して事業化することを少しも畏れない。

「それを仕事にしよう」

新しいものに興味を持ったのは証券業界の特性というわけではないだろうが、伊藤から十年ほど遅れて「東京システムハウス株式会社」を設立した高橋勝也も証券業界からのスピニアウトである。

伊藤が「日本タイムシェア」を設立したのは六八年四月、資本金は四百万円だった。社名はもちろんタイムシェアリング・サービスにちなんでいる。

独立に際して伊藤はコンピュータアプリケーションズの
大久保茂に相談した。

「考え直しなさい。面白いが、儲からない」と大久保は言った。

ところが伊藤はそう考えなかった。

「面白いならいいじゃないか」

このあたり、SRAの丸森とよく似ている。

創業に当たって伊藤は次のように言った。

当社は知識産業を標榜する企業になりたいと考えている。当面の目標は、データ通信を利用する大規模システムの設計と運用技術の開発である。この基本方針のもと、当社は
大前提として研究開発投資と高度な技術の育成を重視する。

「未来への挑戦」

それが日本タイムシェアです。

設立から五年目で資本金は六千四百万円（十六倍）、従業員は二百二十人だった。当初から日本電気との関係が深く、コンピュータ室の運用管理業務を経てソフト開発に手を広げた。証券業界出身だけに、その方面に強みを発揮した。ばかりでなく、社名の通りオンライン・システムの設計と開発が得意分野になった。

さらにその五年後には、資本金は一億円、従業員は四百五十人、売上高は三十一億円に成長した。ソフトウエア産業振興協会では丸森、伊藤が、若手のリーダー格だったのち副会長となったのも丸森と歩を一にしている。

誤解のないようにあえて書いておきたいことがある。

日本タイムシェアという会社は二〇〇五年十月、同業のソランに経営統合されて消滅した。そののち「テクノインフィニタス」（一九九六年十二月設立）が「日本タイムシェア」を名乗ったことがあった。無論、伊藤が設立した日本タイムシェアとは無縁である。

七〇年五月に誕生した「株式会社セック」という会社が面白い。

創業社長の矢野恭一は東大在学中に原子力開発用の解析プログラムに没頭し、就職活動に出遅れた。それでも「東大」であれば就職口はいくらでもあったが、学生時代にすでに会社を設立していたことから、同じ東大の仲間を集め、本腰を入れることにした。

「二十二歳でソフト会社の経営者というのは、当時、いちばん若かったのではないか」

と矢野は言う。

その通りであろう。

おそらくリクルートと並んで「日本で初めて」に属する学生ベンチャー企業でもあった。

プログラム作成業務より、システム分析やトータル・プランニング、解析などを専門に行い、国内に数少ない「システム設計業」を営んだ。その業態は、以後も基本的に変わることがなかった。

「プログラム作りが面白かった。気がついたら会社になっていた」

経営者の意識はほとんどなかった。やりたい仕事をしていただけだったので、技術者の派遣というようなことは始めから念頭になかった。

このために設立から十年を経ても、従業員は二十七人にしか増えなかった。というより増やさなかった。その代わり、情報処理技術者資格の「特種」取得がこの会社では当たり前前だった。修士号、博士号を持つ社員が何人もいた。

「人が増えると、質が落ちる」

というのが哲学になった。

当時、一般のソフト会社は売上高の三割前後が外注費、つまり受け入れる派遣要員のために支払われた。売上高が十億円であっても、真水は七億円という感じだった。

ところがセックは下請けをいっさい使わなかった。一九八〇年度の売上高は二億三千万円、従業員一人当たり年間

八百七十万円というのは、驚くほど高い収益率だった。そういう会社もあった。

三

セックと同じ七〇年五月に誕生した「株式会社富士ソフトウエア研究所」もユニークな存在だった。創業したのは野澤宏という人である。最初の「本社」は横浜市旭区にあった団地の一室だった。

一九四二年東京に生まれ、六六年に東京電機大学の工学部を出た。大明電話工業という、電電公社の下請け会社に勤めたあと、六七年に日本電子工学院（のち「日本工学院専門学校」）の講師になった。

「学校にちよこちよ顔を見せる人がいました。どんな仕事の人だろうと思って尋ねると、コンピュータのオペレーターを派遣している会社の人で、学生を勧誘していたんですね。それなら自分にもできる、と思ったわけです」

設立時の社員は、全員が教え子である。

松倉哲、浜明などにとつて、野澤は社長であり先生でもあった。学校の雰囲気そのまま持ち込んだために、この会社には八〇年代に入っても「夏休み」というものがあつた。

お盆の季節に三日、四日の有給休暇を認める、というような生易しい休暇ではない。丸々一か月、休む。年末年始も二週間の「冬休み」があった。

野澤が授業で教えたのはマイコンだった。電子計算機はとても高価で、専門学校では購入できなかったのだ。このため社内では、学校のクラブの感覚で使うマイコン用プログラムを開発し、社外では電子計算機用のアプリケーション・プログラムを作った。業務アプリケーションの開発は二次請け、三次請けの派遣だった。

——どうすれば下請けから抜け出せるかと考えた。

労働組合との関係で残業を規制せざるを得ない電機メーカーの工場から、制御システム作りの仕事を取った。これはユーザーと直接契約する受託型だった。松下電器産業とコンピュータサービスの関係とよく似ている。

この会社には、東京・芝浦に向かう途中にあつた小さなビルに本社を置いていた当時、取材をしたことがある。木造三階建ての古い建物があつたり、運河をわたる風に潮の匂いがしていた。むろん現今そのあたりは再開発が進み、かつての面影はない。

同年代の、のっそりした、外見というものをまったく気にしない感じの男性が対応した。名刺の肩書きには「係長」

とあつた。松倉哲という人は、そのまま出世して二代目の社長になつている。「哲」は「あきら」と読む。

よもや現在は違ふのだらうけれど、当時は全員が灰色の工員服だつた。

「社長です」

と紹介された人も同じ作業服だつた。

こういう会社もあつた。

補注

舟渡善作 ふなわたし・ぜんさく／1923～2015。一九六六年九月、日本コンピュータ・システムを創業し社長となり、九七年会長、二〇〇三年相談役となった。社団法人情報サービス産業協会の常務理事、関西支部長を務めた。

NEAC1201 日本電気がパラメトロンを使って開発した小型計算機。国産電子計算機で初めてベストセラー・マシンとなった。のちの「オフコン」の原型として記録される。第一百十二「国民機」参照。

東京システムハウス 七六年十一月高橋勝也が東京・京橋に創業し、業務アプリケーション・システムの受託開発とパソコン用パッケージの開発・販売で成長、九五年にオープンシステム向けC/OBOL ジェネレーター「ACUCOBOL」の販売を開始した。

タイムシェアリング・サービス 人がコマンドやデータを入力するよりプロセッサの演算速度がはるかに速いことを利用し、一個のプロセッサで複数の演算処理をあたかも同時にこなしているように実行する。プロセッサやメモリーを分割し統合的に管理することで、実際は順番に処理しているのだが処理速度が速いため並列・同時に演算しているように見える。それを実現しているのは入出力を制御するOSの機能にあつて、マルチユーザー・システム、マルチタスク・システム、リアルタイム処理システムの多くはこの技術を使っている。

内久保晋一郎 うちくぼ・しんいちろう／1928～ .. 島根県

に生まれ京都帝国大学法学部を出て三和銀行に入った。八二年日本火災海上保険専務を経て八八年日本システムデベロプメント副社長、九六年社長、九九年会長となったが二〇〇〇年十月社長兼会長に復帰し〇一年三月社長を小岸勲に譲った。

大津タイヤ 大阪・泉大津に工場を持つ自動車用タイヤ・メーカーで「ファルケン」のブランドで知られた。のち「オーツタイヤ」と改称し、八一年住友ゴムと提携、二〇〇三年住友ゴムと合併した。「ファルケン」はダンロップ、グッドイヤーと並ぶ同社のタイヤ・ブランドとなった。

第一生命コンピュータセンター 六八年、東名高速道路大井松田インターチェンジに完成した。十八階建ての巨大なビルのためランドマークとして知られ、一時期はここに本社機構を移すということから産業界で話題となった。結局、本社機構は移転せず、首都圏近郊型コンピュータ・センターとして活用され子会社の第一生命コンピュータシステム(九九年「第一生命情報システム」に改称)が入っていた。

日本IT書紀 177 次録

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。